

神戸文朗先生のご退職に寄せて

白鷗大学教育学部教授

平 田 乃 美

神戸文朗先生は、この春ご定年退職の日を迎えられました。在職期間は、白鷗女子短期大学の時代であった1984（昭和59）年4月から本2020（令和2）年3月末日まで、満35年間となります。まずは、研究者として教育者として、昭和、平成、令和と3元号の長きにわたり、神戸先生より賜りました本学への多大なご尽力ご貢献に心からの感謝を申し上げます。また、白鷗大学教育学部設立後は心理学専攻に所属され、近年は、心理学専攻の長としてわたくしども専攻教員を率い、ご指導くださいました。

神戸先生のご研究テーマは、「(6点、n線)図形というn個の線分からなる特殊な幾何学図形を使って、ヒトがどのように図形を認識するかを明らかにすること」、また、母校早稲田大学で取得された博士学位の論文題目は「図形認知の研究における(6点、n線)図形の持つ意義」、とうかがっております。これまでの研究で明らかにされた「抽象的な幾何学的特性(位相幾何学的特徴)の違いが図形の区別に重要であること」を踏まえて、神戸先生の現在のご関心は、「2図形間で位相幾何学的な特徴がすべて同じであるとき、どのようなより具体的な幾何学的特性(非位相幾何学的特徴)の違いが図形の区別に有効であるかを調べること」とのことです。

専門性の高い研究課題で、門外漢には毎回のご解説に質問をさせていただくのもたいへん難しいのですが、人間の感覚、知覚、認知領域の心理学、脳神経科学など、関連分野の世界の研究動向について、常に最新の学術誌で情報更新されている神戸先生のお姿は、学生にとっても、わたくしども後進の心理学徒にとっても、研究者、学者としてのあり方、生き方を鮮明に教えてくださるものでした。ときに学事日程や世俗には無頓着と

いってよいほど、新学期や定期試験、盆暮れの大学休業前の時期にも、実験室の前で「実験に参加してくれる人はいないかな。ああ、さすがに今週はだめかい。まだ参加してないのは君か」などと声を掛けては、学生たちも「人さらいがきた」「大変、〇〇ちゃんが拉致された」と笑い合い、おかげで実験実習日の心理学教室は、いつも楽しく賑やかでした。

神戸先生の研究活動を楽しむ姿勢は、学術誌への論文投稿の過程においても同じでした。海外の査読者からの手厳しい指摘や徹に入り細にわたる要求に頭を抱えながらも、「ここは相手の勘違いなのだけど、うまく伝わらなくてね。でも、こっちの指摘はなかなか意義のある展開になりそうだと、通常なら気落ちしてしまうような論評に対しても、むしろ新しい視点の発見や議論の深まりを歓迎するかのように、いつも意気込んで審査の進捗を解説してくださいました。先生はよく、「論文審査時の議論は、コミュニケーションの最たるものだ」と仰っていました。先生の科学者気質は、感傷や感情、損得尽くではなく、純然と論理で相手と向き合い分かち合っていく議論の過程そのものに価値を見出していたように思います。その志向は、アメリカ心理学会（APA）や公益財団法人・日本心理学会（代議員）での学術活動を通じた世界の高等教育事情などの根拠資料に基づき、大学の理念や意義・運営、心理学教育のカリキュラム検討などの会議、ときには宴席や学生とのレクリエーションにおいても一貫してましたため、想定外の場面で議論がしばしば白熱したことなども振り返りますと懐かしい思い出です。

休日にはフランス料理に腕を振るわれて、都会的なインテリアセンスのご自宅で国内外の研究仲間や卒業生たちと、スポーツやファッション、パリでの食べ歩きや政治経済の話題まで大いに語り、余暇を楽しまれてもいました。「考えてみれば、いい人生だよ」と折にふれて口にされながら、心理学者・教育者、大学人として、個人的には母校の研究室の大先輩として、先生は大切なことをたくさん教えてくださいました。

今春、たいへん嬉しいことに、神戸先生は白鷗大学名誉教授の称号を授

与されました。その際、「論文投稿のときに大学のメールアドレスが継続できる」ことを最初に挙げて喜んでいらしたお姿も、いかにも神戸先生のお人柄らしく、襟を正す思いとともに心に刻まれました。どうぞ今後ともこれまでと変わることなく、わたくしども後進に温かいご指導ご鞭撻を賜りますよう、重ねてお願い申し上げます。先生のご健康と益々のご多幸をお祈りして、真心からの尊敬と感謝をここに捧げます。

神戸文朗先生、本当に、本当にありがとうございました。

